

平成22年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

自立心と豊かな人間性をはぐくむための、児童生徒の発達段階に応じた小中学校の一貫した教育課程・指導方法に関する研究開発

2 研究の概要

学校教育の現状を踏まえ、自立心と豊かな人間性を備え、自己実現を目指す児童生徒を育成するために、発達段階に即し、義務教育9年間を「前期」（第1～4学年）、「中期」（第5～7学年）、「後期」（第8～9学年）の3段階に分け、一貫した教育課程を研究開発する。

小中学校の全学年に「人との関わり体験科」（週1時間程度）を新設し、地域の人々や職場・産業との積極的な関わりを通して、豊かな心や自立へとつながる勤労観・職業観を高める。

さらに、教科等に対する意欲や自己表現力を高め、児童生徒の自他理解能力やコミュニケーション能力をはぐくむ時間として、『英会話』と『表現活動』からなる「創造表現科」（週1.5時間程度、第1～2学年については英会話のみ）、及び「そろばんの時間」（第3～6学年は年間20時間、第7～9学年は年間15時間）を設置する。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

児童生徒の発達段階に即して、義務教育9年間を前期、中期、後期の3段階に分け、一貫性のある教育課程を構築する。特に、次の2点について研究開発を行うことにより、自立心と豊かな人間性を備えた児童生徒を育成する。

ア 教科等の指導法を工夫・改善することにより、主体的に学ぶ態度や基礎・基本の確かな定着を図り、キャリア発達の基盤となる確かな学力をはぐくむ。

イ 「人との関わり体験科」「創造表現科」「そろばんの時間」を実施することにより、児童生徒一人一人の豊かな心や自己表現力を高め、キャリア発達の基礎をはぐくむ。

（2）教育課程の特例

ア 児童生徒の身体、認知・思考、精神面の発達の現状に即して、義務教育9年間を、前期（第1～4学年）、中期（第5～7学年）、後期（第8～9学年）の3段階に分け、一貫した指導を行う。

イ 小・中学校の「総合的な学習の時間」、第1～2学年の「生活科」の一部に替えて、第1～9学年における「人との関わり体験科」、「創造表現科」及び第3～9学年における「そろばんの時間」を継続して設置する。

これらの新設教科を、「キャリア発達に関する8能力」をはぐくむための一つの柱ととらえ、「人との関わり体験科」では、「コミュニケーション能力」「自他の理解能力」「情報収集・探索能力」「職業理解能力」「役割把握・認識能力」「計画実行能力」「選択能力」「課題解決能力」のすべてを、「創造表現科」では「コミュニケーション能力」と「自他の理解能力」を、そして「そろばんの時間」では「計画実行能力」と「課題解決能力」を中心に育成を図る。

なお、「人との関わり体験科」「創造表現科(表現活動・英会話)」「そろばんの時間」の解説書及びテキスト作成を行い、教材として使用する。

4 研究内容

（1）教育課程の内容

ア 発達段階に即した学年区分の見直し（4・3・2制への移行）

（ア）学年区分ごとの重点事項

発達段階に即し、義務教育9年間を前期、中期、後期の3段階に区分し、指導方法や内容について、各段階ごとの重点事項を明確にした。

前期（第1～4学年）	学習訓練の徹底を図り、具体的思考力を高める時期
中期（第5～7学年）	具体的思考から抽象的思考への円滑な移行を図り、自己学習力を高める時期
後期（第8～9学年）	抽象的思考力を伸ばし、主体的学習力を高める時期

（イ）小中学校間のスムーズな接続を図るための「つなぎの時期」の教育課程

a 小・中学校間のスムーズな接続を図るために、つなぎの時期である「中期」に重

点を置き、自己有用感や安心感・意欲等を高め、学習内容の一層の定着を図るため、第5～6学年の一部教科担任制や小・中学校教師の相互乗り入れによる授業を行う。該当教科においては、専門性を生かした教科指導を行うことができると考える。

b 小・中学校の一貫した研究組織、校務分掌体制を構築し、指導の充実を図る。

イ 確かな学力を高める指導方法の工夫

(ア) 段階ごとに重点化した指導の工夫

義務教育9年間で、児童生徒の認知・思考面、情緒の発達の面から3段階に分け、段階ごとに取組の重点を設定した。

a 前期（第1～4学年）

「国語」「算数」を中心に、学級担任と副担任の協力体制に基づくTTや、段階的な習熟度別学習を展開した。問題や学習課題に応じて、習熟度別の少人数学習を展開し、学習の基礎となる、「読む、書く、聞く、計算する」などの個別指導を充実させた。また、具体的思考力を支えるために、具体物による操作や動作化を積極的に取り入れた学習活動を行った。さらに、自己学習力を高める中期へとつなぐために、2～4人組での意見の伝え合い学習を取り入れ、話し合いの基礎を学び、コミュニケーション能力や達成感、自己有用感をはぐくむ取組を行った。

b 中期（第5～7学年）

形成的評価を生かしつつ、児童生徒の選択による習熟度別やコース別の少人数学習を積極的に取り入れながら個人カルテの活用を図り、一人一人に応じた支援を行った。また、自己学習型の授業を展開するために、自力解決の時間や話し合い学習（共同解決）の時間を確保し、それぞれの思いや考えを伝え合い、互いを評価し合ったり、考えを高め合ったりできる授業づくりを行った。また、小・中学校間の教師の交流を図り、教科の専門性を生かした指導により具体的思考から抽象的思考への円滑な移行を図る指導方法等を工夫した。

c 後期（第8～9学年）

授業の中で児童生徒の関心・意欲を高めることができるように、課題やコースを選択したりする場面を設定し、自ら見通しをもって課題を解決したり、自己評価や相互評価に基づいて目標の再設定や学習活動の工夫改善を図るなどして、自己決定力や課題解決能力の育成を目指す取組を行った。少人数グループで課題に対する自分の意見を述べて互いの考えを深め合ったり、グループとしての意見をまとめたりするなど、集団解決やコミュニケーション能力の育成を図る取組も行った。TTや少人数指導を工夫し、特別教室を活用して学習の場を増やすなどし、基礎的・基本的事項の確実な定着を図るとともに、熊本県学力調査「ゆうチャレンジ」の問題等を活用して、思考力、判断力、表現力等の向上を図った。

(イ) 小中学校共通の授業づくり

a TTや少人数指導の充実

本校では、児童生徒の個に応じた指導の充実のために、国語や算数・数学、英語などを中心に、多くの授業で複数教師による指導を行っている。TTの役割をより明確にしたり、少人数指導のねらいやパターンを再確認したりして授業を行った。互いの教師が自分の役割を自覚し、明確な意図をもって各教科等の指導に当たることによって、授業評価も観点をもって具体的にを行うことができた。

また、中期（第5～7学年）においては、「国語」「算数・数学」「英会話」等一部の教科について小中教師の相互乗り入れ授業を行い、TTにおける小中教師の役割や指導場面を明確にした授業展開に努めてきた。

b 話し合い活動の充実

小中一貫して授業における言語活動を充実させるために、研究開発開始当初から、授業における「話し合い活動」を小中教師の共通実践事項の一つとして取り組んできた。基本となる学習訓練・話し合い学習マニュアルを作成し、児童生徒の司会による話し合い活動を取り入れた授業を一つのモデルとしてきた。

これまでの研究の中で、話し合い活動をさらに充実させるために、話し合い活動の目的、形態などについて再度共通理解を図り、すべての教科の授業で取り組んだり、「言語活動の充実」のために、話し合い活動の前後の流れを重視した授業展開を意識して取り組んだりするなどの改善も行ってきた。

c キャリア教育の視点を取り入れた既存の各教科等における実践

本研究開発では、「職業的（進路）発達に関わる8能力」を、キャリア発達を支える能力として位置付け、新設教科を中心に研究を進めてきた。平成20年度からは、全教科、全領域におけるキャリア教育を展開するために、各既存教科の授業展開の中で8能力の育成につながる学習活動について検討した。まず、すべての教師が、今までに実践した授業の学習指導案から8能力の育成につながる学習場面を拾い出して小中合同研修で検討し、「既存の教科等における8能力育成場面」としてまとめた。また、「既存の教科等における8能力育成」を小中共通の取組の視点とし、各教科等の学習活動で8能力の育成を図る場面を位置付け、授業実践を行った。

さらに、平成21年度からは、これら8能力の育成につながる授業展開について検証を重ね、「インプット→思考→アウトプット」の流れを重視した授業展開を小中共通のモデルとして取り組むこととした。すべての教師がこの流れに沿って指導案を作成して、検証授業を行った。小・中教師が「8能力育成場面」という共通の視点をもって互いの授業を参観することにより、教科を越えて「共通する学習活動」を発見したり、他教科の指導方法を自分の教科に取り入れたりするなど、指導方法の工夫改善につながっている。

ウ キャリア発達に関する8能力をはぐくむ新設教科の実践

(ア) 児童生徒一人一人の豊かな心や自己表現力を高め、キャリア発達の基礎をはぐくむために、文部科学省の「勤労観・職業観をはぐくむ学習プログラムの枠組み」における「職業的（進路）発達にかかわる諸能力」を参考にし、本研究開発が目指す能力を、この4領域8能力とする。

(イ) キャリア発達の基礎をはぐくむために、「人との関わり体験科」「創造表現科」「そらぼんの時間」を設定する。

a 「人との関わり体験科」

「人との関わり体験科」では、人との関わりを中心とした仕事や職業に関する体験活動を通して、職業に関する基本的な知識や技能、及び勤労観・職業観を身に付け、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択・決定できる能力と態度をはぐくむことを目標としている。本校のキャリア教育の柱とも言える新設教科である。他教科との関連を図りながら、「職業的（進路）発達に関わる諸能力（8能力）」の育成を目的とし、「知識理解重視の領域」と「体験活動重視の領域」の2領域で学習を進めている。これらの2領域で学習を進めるうえで、家庭や地域、学校(学級)の「仕事に対する体験活動」と、収入を得るための「職業に対する体験活動」の二つの学習内容で単元を構成している。

9年間を通した系統的なカリキュラムに加え、保育園の協力のもと、本科における保小中連携カリキュラムを新たに作成し、8能力に基づき各発達段階を踏まえた資質や能力を明記している。

平成21年度は、それまでに作成したテキストを再度検討し、改訂版を作成した。

【「人との関わり体験科」の各学年到達目標】

学 年	各 学 年 の 到 達 目 標
第9学年 第8学年	<ul style="list-style-type: none"> ○自他を尊重し積極的に人間関係を築くことができる。 ○メディアや体験を通して、生き方や進路に関する情報を収集・整理し、今の学習の必要性や大切さを理解し、これからの生き方に生かすことができる。 ○自分が憧れとする職業を含めた様々な職業の社会的役割や意義を理解し、進路希望に基づいて計画を立て、その達成に向けて努力することができる。 ○自己責任のもとに進路を選択し、それを次の選択場面に活かしながら、積極的に課題を解決することができる。
第7学年 第6学年 第5学年	<ul style="list-style-type: none"> ○異年齢の人々との関わりを通して、自他理解を深め、自分らしさを発揮することができる。 ○身近な職業や産業について体験したことをまとめ、発表することなどを通して働くことの意義が分かる。 ○社会生活における役割の重要性や関連を理解し、憧れとする職業をもちながら、今しなければならないことに努力することができる。 ○生活や学習及び将来について課題意識をもち、自分の力で解決することができる。

第4学年	○自他のよいところを見つめ、他者の考えを理解しながら、協力して学習や活動に取り組むことができる。
第3学年	○いろいろな職業を調べ、働くことの楽しさが分かる。 ○役割分担の必要性を理解し、自分の将来の生き方を、今の生活や学習と結びつけて考えることができる。 ○自分がよいと思うことに積極的に取り組み、最後までやり遂げることができる。
第2学年	○他者の気持ちを考え、あいさつや返事、お願いやお礼等、他者との基本的なコミュニケーションを図ることができる。
第1学年	○働くことに興味をもち、家庭や学級での役割や係、当番活動に積極的に取り組むことができる。 ○自分に割り当てられた仕事を確実にこなすことができる。 ○よい行いと悪い行いに気付き自分のすべきことは責任をもって行うことができる。

b 「創造表現科」

「創造表現科」では、英語による会話や日本語によるスピーチ力を高め、自他の理解能力及びコミュニケーション能力の育成を図る。

◎ 「表現活動」

「創造表現科」では、自他の理解能力及びコミュニケーション能力を高めるとともに、主体的に豊かな人間関係を築こうとする態度を育てることを目標としている。「表現活動」では、スピーチを聞く活動やスピーチをより良いものに練り上げる話し合い活動を併せて行うことで、児童生徒が話し手の思いを受け止めたり、自分の思いを語ったりしてコミュニケーション能力を高めていくことをねらっている。また言語能力の向上を目指し、「司会力」の育成に重点を置いたり、後期においてのディベート的な討論の導入を検討したりしてきた。

【「創造表現科(表現活動)」の各学年到達目標】

学 年	各 学 年 の 到 達 目 標
第9学年 第8学年	○自分自身の夢や将来について考えたことについて、効果的にスピーチをすることができる。
第7学年 第6学年 第5学年	○身近な人から校区全般の特徴について聞いたことをもとに、話の組立てを工夫しスピーチをすることができる。
第4学年 第3学年	○自分や友だちなどの長所について、自分の考えが相手に分かるように筋道を立ててスピーチをすることができる。

◎ 「英会話」

「英会話」では、「聞き取る力」「話す力」を中心として、日常の生活場面に即した語彙や表現を精選し、語彙の習得から自己表現へとつながるよう指導する。さらに、その中で習得した技能を用いて、「会話を切り出し、発展させ、結ぶ」といった対話における一連の技能を高めるために、小中一貫した指導を行っている。話す力、聞き取る力の定着度については、ユニットごとの自己評価に加えてリスニングテストやインタビューテストによって評価する。

各学年3～4人(教科担当、専科、担任、ALT)のTTにおける各教師の役割と指導場面の明確化を図ってきた。

【「創造表現科(英会話)」の各学年到達目標】

学 年	各 学 年 の 到 達 目 標
第9学年	○設定されたテーマに関して、自分の意見を述べ、意見交換をすることができる。 ○話題に関連する自分の意見等を付け加えて、会話を続けることができる。
第8学年	○ひとまとまりの話聞いて、その大まかな内容を理解することができる。 ○設定された場面に応じて、相手の意向をくみとり自分の意志を伝えることができる。
第7学年	○場面に応じた会話に、自分の考えを付け加えて、会話を発展させることができる。 ○言い換えたり、聞き返したりして会話を続けることができる。
第6学年	○設定された場面のロールプレイを通して場面に応じた一連のやりとりができる。 ○相手の発話に自然に応答したり、聞き返したりして、会話を続けることができる。
第5学年	○学校や家庭生活において、使用頻度の高い会話表現を用いて質問したりそれに答えたりすることができる。
第4学年	○学校や家庭生活において、使用頻度の高い会話表現を用いて、質問されたことに対して相手に伝わるように答えることができる。
第3学年	○学校や家庭生活において、簡単な会話表現を用いて、質問されたことに対して相手に伝わるように答えることができる。
第2学年	○学校や家庭生活において目に触れるものや使用するものなどの具体物を表す語を聞き取って意味がわかり、また発音することができる。
第1学年	○教室や生活場面で目に触れるものや使用するものなどの具体物を表す語を聞き取って意味がわかり、また発音することができる。

c 「そろばんの時間」

「そろばんの時間」では、「数の操作や指先のトレーニングを通して、計算力、集中力、観察力、情報を処理する能力等を高める」こと及び「進級制を採用し、自信・向上心及び主体的に取り組む態度を育てる」ことを目標としている。自分なりの課題意識や目標をもってそろばんに取り組むことで、達成感や成就感が高まり、他教科の学習への意欲にもつながると期待している。本研究では、「8能力」の中の計画実行能力や課題解決能力を高めることをねらっている。児童生徒が見通しをもって粘り強く取り組めるよう、習熟度別学習を取り入れるなど個別指導にも力を入れている。

【「そろばんの時間」の各学年到達目標】

学年	各学年の到達目標
第9学年	○小数のかけ算やわり算の仕方に慣れ、自分の課題に向かって主体的に取り組む。
第8学年	○小数のかけ算やわり算の仕方を知り、自分の課題に向かって主体的に取り組む。
第7学年	○6桁÷4桁のわり算の仕方を知り、活動に主体的に取り組む。
第6学年	○5桁÷3桁のわり算の仕方を知り、活動に主体的に取り組む。
第5学年	○わり算の仕方に慣れ、活動に主体的に取り組むことができる。
第4学年	○わり算の仕方を知り、正しい姿勢で意欲的に取り組むことができる。
第3学年	○そろばんの使い方や、簡単な加減やかけ算の仕方を知り、正しい姿勢で楽しく取り組むことができる。

(ウ) ポートフォリオを活用した評価の小中共通実践とデータ収集・分析

a 新設教科における、ポートフォリオを活用した評価の実践

- ◎全学年児童生徒にクリアファイルを持たせ、学習歴を時系列に蓄積していく。
- ◎定期的な振り返りで、児童生徒が自らの成長と課題を発見する場を確保する。
- ◎学期の終わりに、過去の学習全体を振り返り、自らの成長を確認するとともに、互いの成長を認め合う時間を設定することで、児童生徒の自己有用感を高める。

b 評価のためのデータの収集と分析

- ◎児童生徒のポートフォリオの中にある記述から、成長の度合いを分析・検証する。
- ◎その分析から、各新設教科のカリキュラム評価を行い、結果を事後指導に生かす。

(2) 研究の経過

第1年次	◎自立心と豊かな人間性をはぐくむ教育課程編成のための基礎的研究 ○一貫性のある教育課程の構築 ・発達段階に即して9年間の指導の重点化を図った教育課程の編成と試行 ・確かな学力（主体的な学習態度と基礎基本の確実な定着）を育成するための指導方法や学習システムの検討と試行 ○豊かな心や自己表現力を高め、キャリア発達の基礎をはぐくむための系統的な「人との関わり体験科」「創造表現科」「そろばんの時間」の計画と試行
第2年次	◎自立心と豊かな人間性をはぐくむ教育課程編成のための実践的研究 ○一貫性のある教育課程の構築 ・発達段階に即した学年区分（4・3・2制）の実施 ・学年区分に即した確かな学力（主体的な学習態度と基礎基本の確実な定着）を育成するための指導方法や学習システムの改善及び実践 ・研究推進システムの改善と検証 ○豊かな心や自己表現力を高めキャリア発達の基礎をはぐくむための系統的な「人との関わり体験科」「創造表現科」「そろばんの時間」の実践
第3年次	◎自立心と豊かな人間性をはぐくむ教育課程編成のための継続的实践と評価 ○一貫性のある教育課程の継続的实践と総括 ○豊かな心や自己表現力を高め、キャリア発達の基礎をはぐくむための系統的な「人との関わり体験科」「創造表現科」「そろばんの時間」の継続的实践と総括 ◎研究成果の公開とその後の研究についての検討
第4年次	◎3年間の研究開発の総括的評価に基づく見直しと修正 ○研究課題と研究の方向性についての審議（継続実践） ○一貫性のある教育課程の確立 ○新設教科「人との関わり体験科」「創造表現科（表現活動・英会話）」「そろばんの時間」の教育課程上の課題検討と今後の方向性確認 ○中1ギャップの解消を中心に据えた児童生徒の実態把握と分析に基づく目標設定

第5年次	<ul style="list-style-type: none"> ◎自立心と豊かな人間性をはぐくむ小中一貫教育の実践的研究と評価 ○児童生徒のキャリア発達を目指す一貫性のある教育課程の継続的実践 ○豊かな心や自己表現力を高めキャリア発達の基礎をはぐくむための新設教科「人との関わり体験科」「創造表現科(表現活動・英会話)」「そろばんの時間」の継続的実践 ○各既存教科とキャリア発達の関連についての継続的研究 ○小1プロブレムの現状把握のための保小中連絡会議の取組 <ul style="list-style-type: none"> ・小中学校教師による保育所参観 ・「基本的生活習慣をはぐくむ連携カリキュラム」の検証 ○中1ギャップの解消へ向けた取組の実践的研究 ◎研究成果の公開とその後の研究についての検討
第6年次	<ul style="list-style-type: none"> ◎自立心と豊かな人間性をはぐくむ小中一貫教育の継続的実践と総括 ○児童生徒のキャリア発達を目指す一貫性のある教育課程及び指導方法の工夫改善に関する継続的実践と総括 ○豊かな心や自己表現力を高めキャリア発達の基礎をはぐくむための新設教科「人との関わり体験科」「創造表現科(表現活動・英会話)」「そろばんの時間」の継続的実践と総括 ○小1プロブレム、中1ギャップの解消へ向けた取組の継続的実践と総括

(3) 評価に関する取組

第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ◎研究全体の評価(運営指導委員会、研究推進委員会、保護者・地域評価委員会) <ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の編成、指導方法、学習システム、「人との関わり体験科」「創造表現科」「そろばんの時間」の計画等、課題認識の的確性について、目標一覧表等に照らした所見による評価(10月、2月) ◎研究のねらいの達成度の評価(教師、児童生徒による評価) <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート(全学年対象 5月・2月実施) ・標準学力検査、基礎基本評価問題、ゆうチャレンジ等 ・自己評価表、ポートフォリオ等(全学年対象、時間ごと実施) ・学級経営案、単元別評価表、個人カルテ(学級・教科担任等)
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ◎研究全体の評価(運営指導委員会、研究推進委員会、保護者・地域評価委員会) <ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の編成、研究組織、指導方法、学習システム、「人との関わり体験科」「創造表現科」「そろばんの時間」の計画等の妥当性について、目標に照らした所見による評価(6月、2月) ◎研究のねらいの達成度の評価(教師、児童生徒による評価) <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート(全学年対象 5月・2月実施) ・標準学力検査、ゆうチャレンジ等の活用と分析 ・自己評価表、ポートフォリオ等(全学年対象、時間ごと実施) ・教師所見、単元別評価表、個人カルテ(学級・教科担任等)
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ◎研究全体の評価(運営指導委員会、研究推進委員会、保護者・地域評価委員会) <ul style="list-style-type: none"> ・目標に照らした所見による評価(6月、12月) ・研究の結果得られた成果の検証と研究成果の一般化 ◎研究のねらいの達成度の評価(教師、児童生徒による評価) <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート(全学年対象 5月・2月実施) ・標準学力検査、ゆうチャレンジ等の活用と分析 ・自己評価表、ポートフォリオ等(全学年対象 時間ごと実施) ・学級経営案、単元別評価表、個人カルテ(学級・教科担任等)
第4年次	<ul style="list-style-type: none"> ◎研究全体の評価(運営指導委員会、研究推進委員会、学校運営協議会) <ul style="list-style-type: none"> ・目標に照らした所見による評価(6月、12月) ・教育課程の編成、研究推進システム、指導法、学習システム、新設教科「人との関わり体験科」「創造表現科(表現活動・英会話)」「そろばんの時間」の年間計画、評価計画等の妥当性について ◎研究のねらいの達成度の評価(教師、児童による評価) <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート(全学年対象 4月・12月・3月実施) ・標準学力検査、ゆうチャレンジ等の活用と分析 ・自己評価表、ポートフォリオ等(全学年対象 時間ごと実施) ・教師所見、単元別評価表、個人カルテ(学級・教科担任等)

第5年次	◎研究全体の評価（運営指導委員会、研究推進委員会、学校運営協議会） ○目標に照らした所見による評価（6月、10月、1月） ◎研究のねらいの達成度の評価（保護者、児童生徒、教師による評価） ①保護者対象 ・研究開発に対する保護者の意識調査（7月実施） ②児童生徒対象 ・8能力の到達状況調査（9月実施） ・新設教科意識調査（9月実施） ・標準学力検査、ゆうチャレンジ等の活用と分析（12月、3月実施） ・小中つながりの意識調査（5・6年生対象 9月実施） ・卒業生への追跡調査（平成20年度末卒業生徒 3月実施） ③教師対象 ・研究開発意識調査（7月、12月実施） ・児童生徒の8能力到達状況調査（7月）
第6年次	◎研究全体の評価（運営指導委員会、研究推進委員会、学校運営協議会） ○目標に照らした所見による評価（6月、12月） ○研究の結果得られた成果の検証と研究成果の一般化 ◎研究のねらいの達成度の評価（教師、児童生徒による評価） ・アンケート（全学年対象 4月・12月・3月実施） ・過年度卒業生へのアンケート ・標準学力検査、熊本県学力調査等の活用と分析 ・自己評価表、ポートフォリオ等（全学年対象 時間ごと実施） ・学校・学年・学級経営案、単元別評価表、個人カルテ（学級・教科担任等）

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

ア 児童生徒への効果

(ア) 小中学校間のスムーズな接続

発達段階に即して義務教育9年間で3段階に区分し、特に「中期」に重点を置くことで、計画的かつ継続的な教科指導が可能となり、小中学校教師の連携に基づく学習指導、生徒指導の充実を図ることができた。

研究開発開始当時わずか50%だった「中学生になることを楽しみにしている」第5・6学年児童の割合は、6年間の研究開発の取組を経て、その値が倍増していることが分かる。【グラフ1】

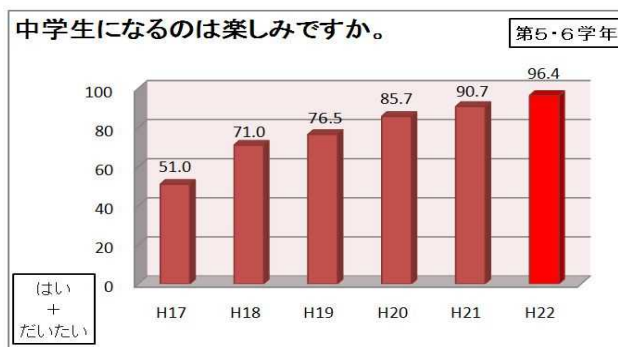
小中学校間をつなぐ「中期」を大切にしてきた実践により、児童生徒の不安が軽減され、このような結果につながっていると考えられる。

また、小中教師の乗り入れ授業についてのアンケート結果を見ると、5、6年授業への中学校教師の乗り入れ、及び7年授業への小学校教師の乗り入れについて「良い」「だいたい良い」と回答した児童生徒の合計が、どちらも毎年90%を越えている。この小中教師の乗り入れ授業の取組が、中期の児童や生徒に肯定的に受け入れられていることが分かる。

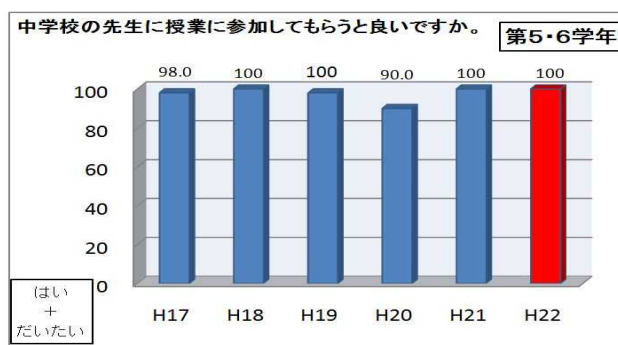
【グラフ2、グラフ3】

これらの結果から、本研究開発がねらう「中期における小学校と中学校の間のスムーズな接続」ができていているということが出来る。

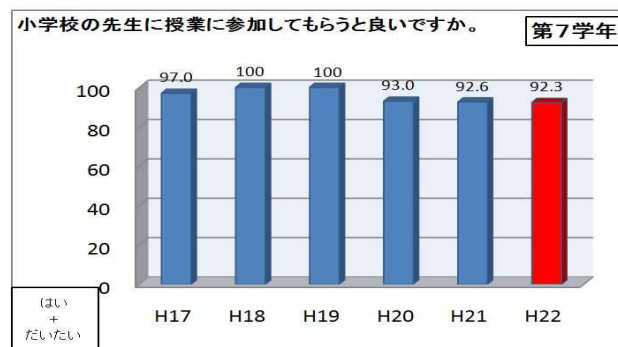
【グラフ1】中学校進学に対する不安の軽減



【グラフ2】中期乗り入れ授業（5・6年アンケート）



【グラフ3】中期乗り入れ授業（7年アンケート）



(イ) キャリア発達に関する8能力をはぐくむ新設教科の取組

キャリア発達に関する8能力を育成するために創設した「新設教科」について、「新設教科の学習を頑張っているか」（後期は、「新設教科の学習は役に立つか」というアンケート）を実施したところ、右のような結果となった。【グラフ4】

「頑張っている」「だいたい頑張っている」、または、「役に立つ」「だいたい役に立つ」と回答した児童生徒の割合は、どの新設教科でも、前・中・後期のすべてにおいて8割を超えている。本校の児童生徒が意欲を持って新設教科の学習に取り組んでいることが分かるとともに、その有用性を感じながら頑張っていることが分かる。

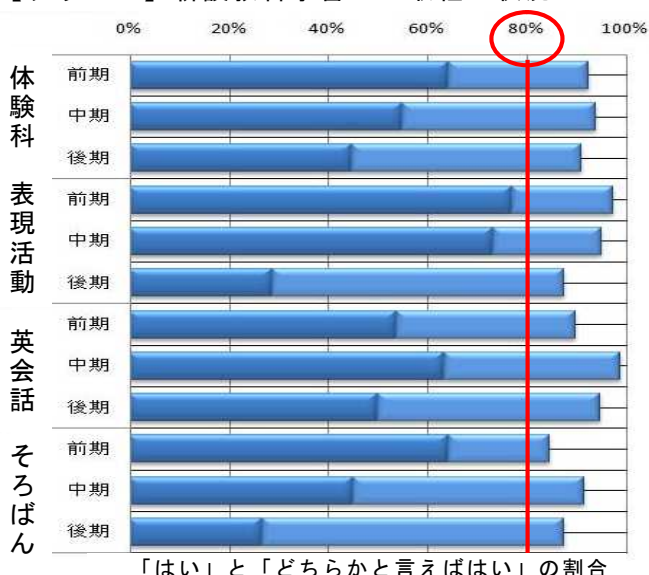
(ウ) 4つの目指す児童像

平成20年度から、自立心と豊かな人間性を兼ね備えた児童生徒の具体的な姿を、「4つの目指す児童生徒像」として捉え直して実践を積み重ねてきた。これまで5年半、キャリア発達に関する8能力の変容を見るために継続して行ってきた児童生徒へのアンケートを、本校が目指す4つの児童生徒像ごとに整理したところ、本年度は右のような結果であった。【グラフ5】

グラフを見ると、「自ら考え、判断し、行動できる」と、「夢や希望に向かってねばり強く努力する」の2項目について教師の評価が低いことが分かる。

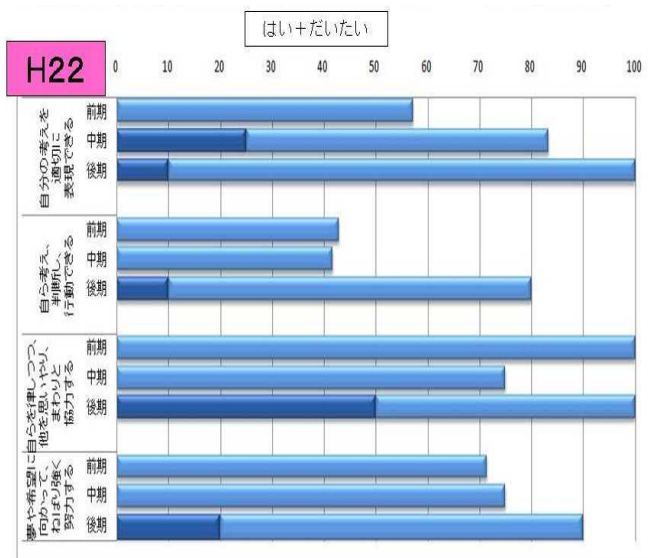
しかし、「後期」についての結果を平成20年度の結果と比較すると、下の【グラフ6】のように、大きく伸びていることが分かる。本校の教師集団が、特に、後期の生徒の変容を捉えて評価していることが分かる。

【グラフ4】新設教科学習への取組の状況

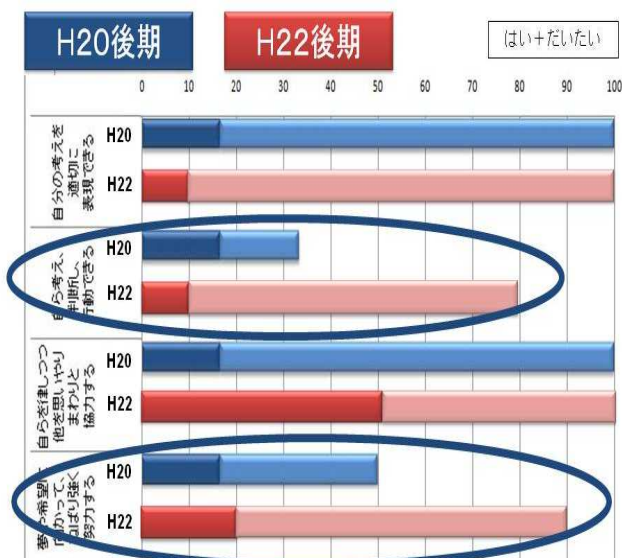


「はい」と「どちらかと言えばはい」の割合

【グラフ5】4つの児童生徒像に関する教師評価 (平成22年度の結果)



【グラフ6】4つの児童生徒像に関する教師評価 (平成20年度後期と平成22年度後期の比較)



(エ) 指導方法の工夫・改善による「確かな学力」の向上

仮説1により、教科等の指導方法を工夫し、確かな学力をはぐくむ取組を行ってきた。今年度在籍している児童生徒の標準学力検査（平成22年3月実施）の結果を見ると、5段階評定の評定2以下の児童生徒の割合を、研究開発開始当時（平成17年3月実施）の結果と比較すると、小学校では17.9%から15.8%へ、中学校においては、28.1%から10.4%へと大きく減少している。【表1】

さらに、学力成就値-4以下の児童生徒の割合を見ても、小学校では12.4%から6.6%へ、中学校では23.0%から7.1%と大きく減少している。全体の学力が向上してきていると言える。【表2】

その結果、小学校の国語、算数、中学校の国語、数学、英語の学力偏差値は、全国平均

を大きく上回る結果となった。【表3】小中教師の共通理解を図りながら、指導方法の工夫・改善に取り組んできたことが、児童生徒の「確かな学力」の向上につながっていると考えられる。【グラフ7】

【表1】 評定2以下の児童生徒の割合比較

校種	H17.3月 実施	H22.3月 実施
小学校	17.9%	15.8%
中学校	28.1%	10.4%

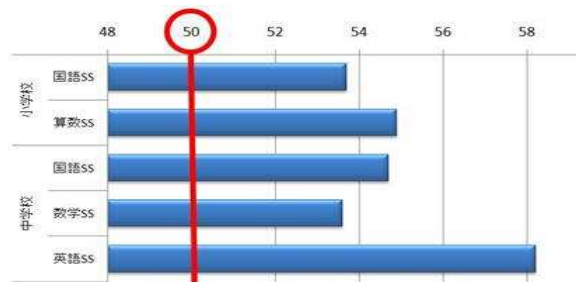
【表2】 成就値-4以下の児童生徒の割合比較

校種	H17.3月 実施	H22.3月 実施
小学校	12.4%	6.6%
中学校	23.0%	7.1%

【表3】 標準学力SS (H22.3 実施)

◆標準学力検査		H22年3月
小学校	国語SS	53.7
	算数SS	54.9
中学校	国語SS	54.7
	数学SS	53.6
	英語SS	58.2

【グラフ7】 標準学力SS (H22.3 実施)



イ 保護者への効果

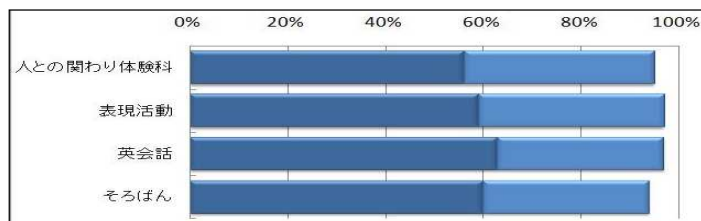
本研究開発を通して本小中学校が取り組んできた「新設教科」の成果と魅力について保護者に尋ねたところ、右のような結果となった。

新設教科への評価については、研究開発開始当初から、年々少しずつ高くなってきており、本年度は、昨年度に続き、すべての教科で9割を超える結果となった。【グラフ8】

また、その他の特徴ある取組に対しても約8割を超える賛同の声をいただいております。小中一貫研究開発の取組が保護者に高く評価されていることが分かる。【グラフ9】

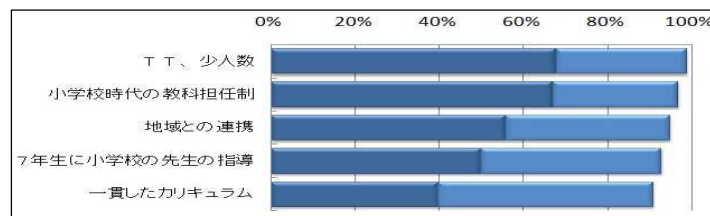
学校運営協議会の取組や学校の学習成果発表会、毎月行われるオープンスクールなどを通して、本小中学校の取組が保護者に着実に理解されてきていると言える。

【グラフ8】 保護者が感じる魅力と成果



※「次の取組に、成果や魅力を感じるか」という問いに対して「はい」「だいたい」と答えた保護者の割合

【グラフ9】 その他の特徴ある取組について



※「次の取組に、成果や魅力を感じるか」という問いに対して「はい」「だいたい」と答えた保護者の割合

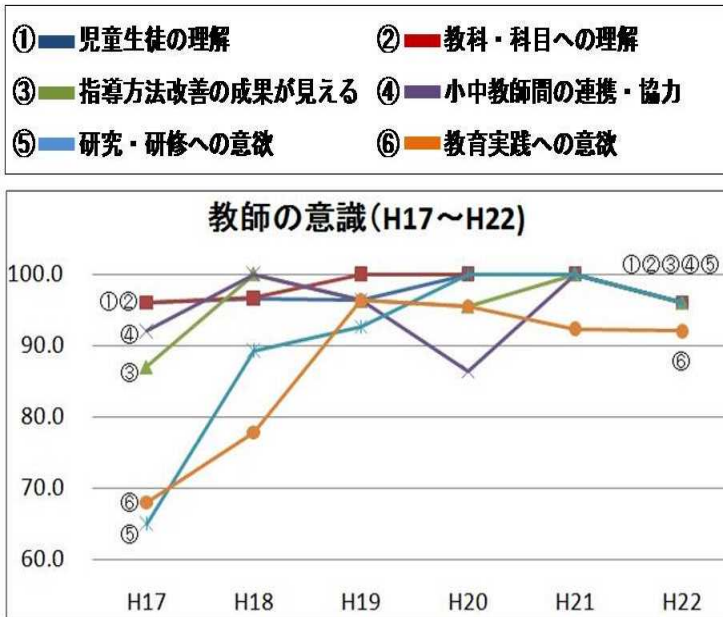
ウ 教師への効果

他のアンケートと同じく、教師に対しても過去6年間、次のような項目についてアンケートを続けて実施してきた。

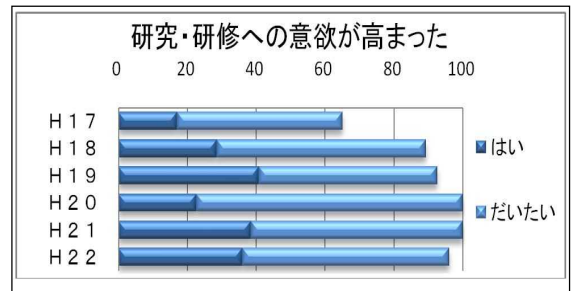
「児童・生徒の理解」「教科・科目への理解」「指導方法の工夫の成果が見えるか」「小中教師間の連携・協力」「研究・研修への意欲」そして「教育実践への意欲」の7項目である。6年間の推移を見ると、研究開発開始後、だんだん高くなり、それが今日まで維持されていることが分かる。【グラフ10】

特に、「研究・研修への意欲」「教育実践への意欲」の項目を取り出して推移を見ると、【グラフ11】及び【グラフ12】のように、当初、6割程度であったものが、年々高まってきていることが分かる。最初の3年間にたくさんの時間をかけて取り組んだ、新設教科の「解説書」や「テキスト」づくり。そして、延長後の3年間で取り組んできた、すべての教科・領域における「キャリア教育の視点を取り入れた小中共通の授業」づくり。小中教師が協力・連携しながら進めてきた実践の成果が、児童生徒の自己表現力や確かな学力の高まりなど、目に見えるようになってきたことが、教師集団の意欲の向上へとつながっていると思われる。

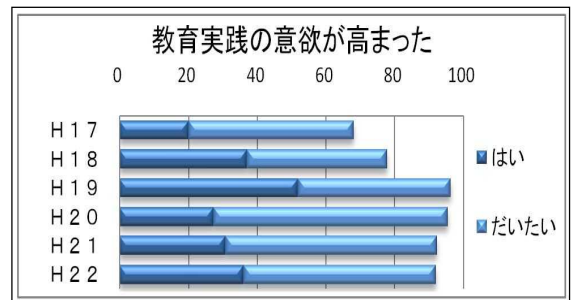
【グラフ10】教師アンケート結果の推移



【グラフ11】研究・研修への意欲



【グラフ12】教育実践の意欲



エ 卒業生への追跡調査から
本研究開発の成果を見るための新しい試みとして、平成20年度より、本小中学校の卒業生に追跡調査を行ってきた。本年度は、平成20年度の卒業生（現高校2年生の同級生）にアンケートへの回答を依頼した。

本小中学校で学んだ新設教科が現在の高校生活、または今後の生活に役立つかという質問をしたところ、右のような結果となった。表記のようなポイントで集計したところ、すべての新設教科で平均の2.5を超える比較的高い数値を示した。

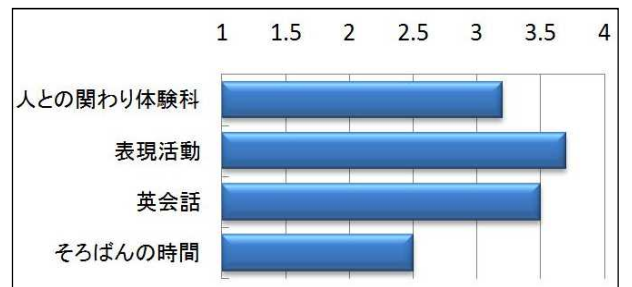
特に本年度は「創造表現科」の「表現活動」と「英会話」で、平均で3.5ポイントを超える高い結果となった。【グラフ13】

これまでずっと、キャリア教育の効果を数値的なデータで表す難しさを感じながら研究に取り組んできた。しかし、昨年度から始めたこの卒業生への追跡調査により、これまでキャリア教育の柱として取り組んできた各新設教科が、卒業後の彼らの生活にプラスに作用している、または今後プラスに作用するであろうということを実感することができた。

今後も、卒業生への追跡調査を継続しながら、本校児童生徒の「自立心と豊かな人間性」の向上を目指して、さらに実践を積み重ねていきたい。

【グラフ13】過年度卒業生への追跡調査

★ 小中学校で学んだ新設教科は、現在の生活や、これからの将来に役立っている（役立つ）と思う。



* とても役に立つ : 4点 まあまあ役に立つ : 3点
あまり役に立たない : 2点 全く役に立たない : 1点

(2) 実施上の問題点と今後の課題

ア 新設教科の成果の継承

「キャリア教育」の視点で小中9年間を貫きながら、「人との関わり体験科」をはじめとする新設教科の成果を継承するべく、それぞれの新設教科を新教育課程の中にどのような形で残していくのか、十分議論を深めていく必要がある。

イ 小中教師間の連携・協力体制の継続

今年度さらに充実を図った乗り入れ授業をはじめ、小中合同研修や合同委員会をできる限り継続していく方向で検討を進めている。どの時間帯に、どのくらいの頻度で実施可能なのか、十分吟味することが必要である。

ウ 地域・保護者とのさらなる連携

本小中学校には、コミュニティ・スクールの下地がある。それを生かし、学校運営協議会の皆様のご指導・ご支援を受けながら、今後の網田小中学校が目指す将来像と一緒に考え、共有化し、地域・保護者が一体となった学校教育を展開していくことが何よりも重要である。

【宇土市立網田小中学校 教育課程表（平成22年度）】

	各教科の授業時数										道徳	特別活動	総合的な学習の時間	選択教科	そろばんの時間	創造表現科		人との関わり体験科	総授業時数
	国語	社会	算数／数学	理科	生活	音楽	図工／美術	家庭／技家	体育／保体	英語						英会話	表現活動		
第1学年	272		136		68 (-34)	68	68		102		34	34				20		34	836 (+20)
第2学年	280		175		70 (-35)	70	70		105		35	35				20		35	895 (+20)
第3学年	235	70	175	90		60	60		90		35	35	0 (-95)		20	30	20	35	955 (+10)
第4学年	235	85	175	105		60	60		90		35	35	0 (-100)		20	30	20	35	985 (+5)
第5学年	180	90	175	105		50	50	60	90		35	35	0 (-110)		20	35	20	35	980
第6学年	175	100	175	105		50	50	55	90		35	35	0 (-110)		20	35	20	35	980
第7学年	140	105	140	105		45	45	70	90	105	35	35	0 (-50)	0 (-15)	15	35	15	35	1015 (+35)
第8学年	105	105	105	140		35	35	70	90	105	35	35	0 (-70)	50	15	35	15	40	1015 (+35)
第9学年	105	85	140	105		35	35	35	90	105	35	35	0 (-70)	80 (-25)	15	35	15	40	990 (+10)
計	1727	640	1396	755	138 (-69)	473	473	290	837	315	314	314	0 (-605)	130 (-40)	125 (+125)	275 (+275)	125 (+125)	324 (+324)	8651 (+135)